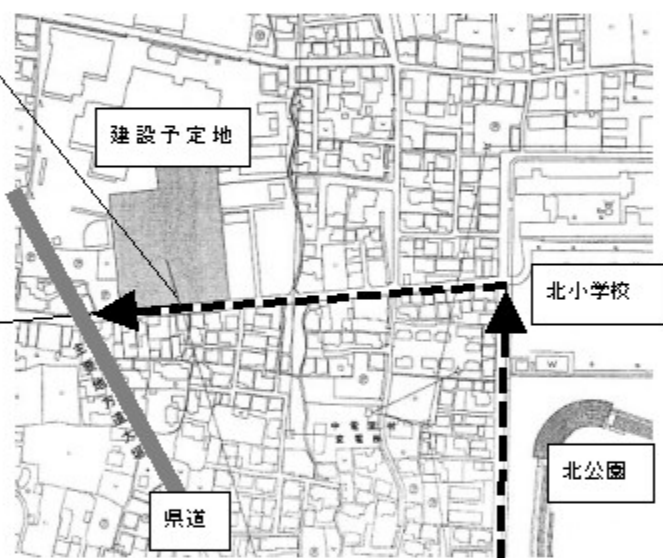


300人規模の北幼保園の計画明らかに

老朽化した北保育園の建て替えを契機に、当初は計画になかった笠木保育園を合併させ、北小内の北幼稚園をまとめて、300人規模とする北幼保園の計画が明らかになりました。この計画、いろいろな問題があります。この間、300人規模の北幼保園について、いくつかの声が出されています。皆さんのご意見をお寄せください。

→ 一方通行の登園ルート
歩道はあるが狭く、
混雑が予想される。
左が幼保園建設予定地



は見当たりません。

交通渋滞が心配

北幼保園建設予定地の南側の道路は、道幅は狭く一方通行です(右図点線矢印)。しかも北小学校の通学路になっており、「交通事情をどのように考えておられるのか」といった心配の声も寄せられています。多くの園児は車で送迎が予想され、設計図では駐車台数47台を想定しており、絶えず車の出入りがあると予想されます。丁度小学校の通学時間と重なるのではないのでしょうか。

保育園は子育て支援の拠点施設

無縁社会といわれる時代に、子育て支援の中心的な役割を担っているのが保育園(幼稚園)です。そのためには、初めて子育てをする新米ママの悩みにも応え、地域の未就園児の子育て相談にも気軽に乗れる園であってほしいと思います。しかし、設計図にはそのような居場所

障がいを持つ子どもたちの居場所はあるのか

幼稚園が子どもの発達保障の場であるためには、その前提条件として、安心できる居場所や心のよりどころとなる人が必要です。その支えがあってはじめて外界に向かって挑戦し、子どもは成長していきます。障がい児も同じ発達過程をたどりますが、大きな集団には恐怖の対象になります。300人規模の幼稚園が、障がい児にとって安心して生活し、活動できる場になるのでしょうか。

脱原発に向けて英知の結集を!

「次世代エネルギーインフラ」

をめざす岐阜県の挑戦

「東日本大震災・東海地震・水害・自然エネルギーを考える」連続講座(東海自治体問題研究所)の3回目に行われた岐阜県の取り組み「次世代エネルギーインフラの構築ー自然エネルギーを利用した持続可能なエネルギー供給システムへの挑戦」が参考になりました。講師は岐阜県商工労働部長の江崎禎英氏でした。

地球温暖化対策に加え、原発依存から脱却するには、私たちの生活スタイル、インフラを抜本的に見直す取り組みが必要です。新エネルギーの導入に向けて、いろいろな課題や問題点があります。「太陽光発電は年間の快晴日が40日ほどしかないため、出力の変動が大きい」、「風力発電は台風で壊れる」、「バイオマスは森林資源の豊かな地域は間伐材などの活用が期待できるが、ペレットボイラーはペレットの製造で多量のエネルギーを消費する」、「中小水力発電は経済合理性のある個所はすでに開発済み」等々。

岐阜県は、①省エネルギーの推進、②複数のエネルギー・技術のベストミックス、③コストメリットを重視したエネルギー技術の導入、という3つの基本方針のもと、次世代エネルギーインフラの実証実験を行っています。近いところではJR岐阜駅をはじめ、県下5カ所で行っています。新エネルギーの導入には地域の特性を生かすことが重要で、また大災害時、送電による電気は不通となることを考え、防災拠点に電源設備を設置するなど、地域に合った電源開発が必要であるなど、現実的な対応の話で、参考になりました。

「明日のエネルギーを考えるツアー」



上写真：超深地層研究所にて、入坑前

中写真：坑の中。岩盤からは地下水が滲出。

下写真：「照久庵」隣の「川上屋」で試食とお買い物

している、日本では2カ所だけの施設です。移動の車中で「放射能のゴミはいらない！市民ネット・岐阜」代表の兼松秀代さんから、超深地層研究所の概要と、その危険性、設立に至るまでの反対運動についてレクチャーを受けました。日本では、東濃地域以外には事実上最終処分の候補地がないということです。

ものすごく危険な研究を平然と — 瑞浪

超深地層研究所では、まず職員から1時間ほど施設と研究の説明を受けました。地層の研究をしているのは、放射性廃棄物を地中深くに投棄するためですが、研究所では投棄した地中から、地下水を通じて何年後に地上に放射性物質が拡散してくるのか、その研究をしています。つまり、投棄しても日本特有の豊富な地下水によって封印が劣化し、地中どころか地上まで放射性物質に曝されるということです。「半減期を過ぎた後」と説明しますが、処分場の破綻を前提に放射性物質の処分の研究を進めるといふ、ものすごく危険な研究を平然としていることに驚きました。

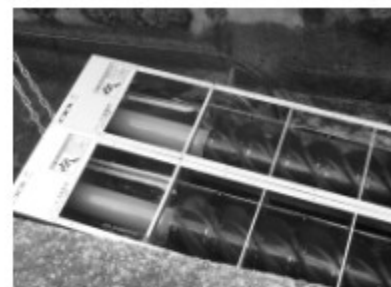
見学の後半では、研究の地下坑に入り、実地で説明を受けました。ヘルメットに鉄心入り長靴、つなぎ服に着替え、もしもの時のためにPHSを携帯します。エレベーターで降りた地下300mは温度が25℃と意外と暖かく、次々と湧き出てくる地下水のせいか、温度が高かったです。地下水は1日700t出ており、3・11の震災以後湧水量が増えています。このような状態で核廃棄物を地中に埋めて、とても大丈夫だとは思いませんでした。

3・11以降実感していることは、私たちは“核廃棄物”という大変なお荷物を大量に抱えており、未だその処理について解決の見通しを持っていないこと、はっきりしていることはこれ以上の核廃棄物を増やさないことです。

私たちもできるエネルギーづくり — 恵那

恵那市のまちなかに移動し、恵那市文化センターで小水力発電機「ピコピカ」の学習会。ピコピカはセンターのすぐ前の用水路に無造作に設置しており、NPO法人「地球の未来」の駒宮さんが説明してくれました。設計のコ

ンセプトとしてはなるべく身近なものを使ってということで、自転車用の発電機や、ペットボトルのキャップを原料とした水車を使っています。もう一ヶ所、隣接する長島小学校にも設置してあるというので見に行くと、こちらはもっと小さなまさに「溝」に設置された極小水力発電機でした。それでも、LED照明を点灯させることができます。「…これなら作れそう」と思った参加者もいたとか。未来の「私たちによる」エネルギー生産の姿を垣間見ることができた、そんな学習会でした。



上写真：小水力発電機「ピコピカ」

中写真：長島小学校の極小「ピコピカ」（手前）

下写真：文化センター前にて。駒宮さんの説明を聞く